
ね

るうね

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ね

【Zコード】

Z52430

【作者名】

るつね

【あらすじ】

愚痴です。不快になりたくない人は回避した方が良いかと。

不定期連載

強い言葉

「うん? なに」「ね

「最近、やたらと強い言葉を使う人が増えたよね」

「強い言葉?」

「『馬鹿』とか『死ね』とか『バルス』とか」

「最後のはともかく、たしかにそうだね」

「なんで、そんな言葉を使うんだろうね」

「んー」

「馬鹿って言う方が馬鹿なんだ、って格言があるじゃない」

「格言かどうかはともかく、あるね」

「あれってさ、『馬鹿』なんて強い言葉を簡単に使ってしまつ思慮の浅さを指摘したものだと思つんだ」

「そつかもね」

「相手がそれを聞いて（読んで）びつ思つが、考えないのかな。それとも考えた上で使つてるのかな。だとしたら最低だけど」

「ふーむ」

「最近の風潮でさ」

「うん」

「強い言葉を使う 正しい意見、みたいなところがあるじゃない」

「あー、あるね」

「声が大きければ、それが正論に聞こえる、つていうかね」

「思うにね」

「うん」

「そういう強い言葉を口にする人は、弱いんだよ」

「そつな?」

「弱いから、自分の意見の正しさが確信できない。そうした自分の弱さを隠すために、強い言葉を使つてるんじゃないかな。意識的に

かどうかは分からぬけど。実際、そういう人を見ると、他者を
かなり強い言葉で非難しているわりに、自分がそういう言葉を向け
られるのを人一倍恐れているよう見えよ

「自分が強い言葉を使うのはいいけど、自分に使われるのは嫌だ、
つて？ ずいぶんと勝手な話」

「だね。少なくとも、創作者たる自負がある以上は、言葉の強弱に
敏感になって、使用する時には細心の注意を払うべきだと思つよ
「まったく、強い言葉を安易に用いる馬鹿は死ねばいいのに
「うわ、台無しだあ」

注文の多い創作者

「ね」

「うん？ なに」

「最近、読者」というか、その感想の書き方に關して注文が多い
創作者が増えてきたよね」

「あー、見かけるね。もつと思いやりを持つて感想を書け、みたいな
な」

「不用意に厳しい感想を書いて、作者が傷つき小説を書くのをやめ
てしまつたら、どうするんだー」

「ははは」

「まあ、別にそつ思つのは勝手だけども」

「あんまりにも注文が多くなる、と？」

「うん。でさ、そういう注文の多い作者ほど、血口の作品に対する
批判を許容できない傾向がある気がする」

「たしかに」

「もちろん、明らかな誹謗中傷の類は論外だけども。最近は、ただ
厳しめの感想にすら拒絶反応を起こす作者が多い気がするんだ」

「そういえば、この前、ある作品の感想欄で見かけたんだけど」

「うん」

「感想のうの一いつで、全体的には褒めてたんだけど、最後に少し
だけ作品の問題点を指摘してたものがあつたんだ」

「うんうん、それで？」

「作者が返信で、数行に渡つて、指摘された部分に対し言い訳と
反論」

「うわあ……」

「そこは、これこれこりこり意図で書いたんですね。だから、その読
み方は間違っていますよ（意訳）」

「読者の読み方にケチをつけるつて……は、恥ずかしくないのかな、

「創作者として」

「作者がどんな意図を持つて書いていようが、読者にはそんなこと全く関係ないのにね。読者が感じたことが全て。書かれた感想や指摘を受け入れるかどうかは作者の自由だけど、読者の読み方に異を唱えるのはまずいよね」

「その感想を書いた人も災難だね。もつ感想を書こうといつ気にならなくなっちゃうんじゃない? 読者が傷つき、感想を書けなくなつたら、どうするんだー?」

「ははは」

「小説に限らず、あらゆる創作物は、『発信者』と『受信者』の双方がいないと成立しないものね。どちらか一方に過剰な要求をするのは、いかがなものかと」

「少なくとも、作者が感想を選び好みするような態度を見せるのは、いただけないよね」

「うんうん。さて、そろそろ食事時だね。今日せどりで食べる?」

「あ、それなら僕がいいお店を知ってるよ。ちょっと密に対して注文が多い店なんだけど」

「え、それって」

作者と作品

「ね」

「うん？ なに」

「時々、作者と作品は別物だから、分けて考えて欲しい、みたいなことを言つてる人がいるけど……」

「いるね」

「無理でしょ」

「無理だね」

「たとえば、わたしなんかは北方謙三の作品が好きだけど、彼自身は好きじゃないんだよね。エッセイなんかに見られる、物の考え方とか。だから、彼の小説を読む時には、人格とか気にしないようにしようと思つてはいるんだけど、そうしたことが頭をよぎつて、純粹に楽しめないこともしばしば」

「接点が少ないプロの小説家にしてそつなんだから、いわんや交流が容易で人格が表出しやすいネット作家においておや、だね」

「ネットでの人格がそのままリアルの人格でないことは百も承知だけど、じゃあリアルでの人格がどうかなんてことは分かりようがないよね。結局は、その人の書く文章から推し量るしかない」

「それなのに、作品と作者は別物デース、ボクが何を言つても、作品を色眼鏡で見ないでね とか言われてもねえ」

「前回書いた『読者に対する過剰な要求』につながるものがあるかな」

「思うにさ」

「うん」

「予防線なんじゃないかな。作者と作品をうんぬん、と主張する人有限つて、やたらと強い言葉を使って悦に入つてたりするし」

「そうした言動を取ることによつて、読者が減ることを恐れてるってこと?」

「多分ね。意識してやっているのか、無意識なのかは知らないけど」「根性ないなあ。そんなこと気にするぐらいなら、毒を吐かなきゃいいの」

「まつたくね。僕たちも、いろんなこと話している時点で、ある程度のことは覚悟しているし。多分、これを読んで離れていく読者も、けつこうこると思ひ」

「でもや」

「うん？」

「離れるせじ、もともとの読者がいないんじゃない？」

「それを言つたりやあ……」

「うん？ なに」「ね」

「長期連載停止中の作品について、どう思つ?」

「うーん、難しいところだね。長期連載停止中、と言つても、十把一からげにはできないし。いくつかに分類する必要があると思つよ」「たとえば?」

「まず、作者が何らかの理由で書くことができない状態にある場合。極端な話、死亡したりとか」

「病気で長期療養中とか、会社の仕事が忙しくなったとか?」

「そうそう。あとはメンタル的な問題もあるかな。近親者が亡くなつた人が、コメディーなんかを連載していたとしたら……」

「ああ、それは書けなくなりそう」

「次に、単純に書く気がなくなった人。趣味で小説を書いてた人が、もつと他に興味のあることを見つけて、そのままフェードアウト」

「うーん、それはちょっとアレだね」

「で、最後に、他に書きたい小説のネタを思いついて、そちらを優先、結果的に、古い小説は放置、みたいな人。『小説家になろう』で、一番多いのが、このタイプじゃないかな」

「よく、新連載を連発している人を見かけるもんね」

「うんうん、書くことができない人はともかく、他の二つのタイプの人は、まあ非難されても仕方のない部分はあるよね」「そうだねー。けしからんですね、パンパン」

「はい、それじゃ、今回のテーマについては、これで終わりということで」

「とはいかないんだな、これが」「え?」

「今回、わたしが言及したいのは、非難する側なんだよ」

「どうこう」と…

「やたらと長期連載停止中の作者を非難して、時には人格否定まで

しているような人を見かけるけどさ。あれってどうなの？」と

「あー、まあいき過ぎた非難をしてる人が、けっここうじるよね」

「よく、プロでもアマでも自分の書いた作品には責任を持つべきだ、

という論調があるけど」

「うん」

「ぶつちやけるよ?」

「じゃ」

「所詮、綺麗」とでしょ、そんなの」

「はい、今のとこカッター」

「テレビじゃないから」

「ぶつちやけすぎでしょ」

「いや、だつてさあ、お金もらって書いてるならともかく、趣味で書いてるわけじゃん。建前はともかく、現実問題として書く気がなくなつたから、やめた、つてのがそんなに悪いことだとは思えないんだよ。楽しみにしていた読者を裏切る行為だ、というのも分からぬではないけど、んじや、読者の方は作者に何を『え』ていたのかな、と」

「読者が作者に『え』るもの……感想とか?」

「それも含めて、作者の楽しみになるようなこと。わたしは、作者と読者は対等の関係にあると思ってるから。少なくとも、趣味で書かれている小説に関しては」

「一方的に楽しみを享受するだけでは、不公平だと言いたいんだね?」

「そうそう。たとえ批判的な感想でも、しつかり読まれてるな、と作者が感じれば、次の活力につながると思うんだ。そうしたことでも、作者に楽しみを『え』なかつた読者(仮)が、作者を手厳しい非難するのは、どうにも違和感がある。ましてや、作品を読んでもいなかつた『部外者』が、作者の人格否定までしているのを見ると、

なんだかなあ、と思つよ」

「長期連載停止中の作者を非難する人は、まず己を顧みよ、ということだね」

「まあ、完結した駄作と完結しない名作では、前者の方が価値があるというのは間違いないところなんだけれどね」

「あ、最後に綺麗ごとでしめた」

読者を馬鹿にするだけの危険性

「ね」

「うん？ なに」

「『小説家になろう』のランキングなんだけど……」

「あー、つこにその話か」

「なんか似たような話が並んでるよね」

「異世界、ファンタジー、チート、ハーレム……まあ、ランキングを狙うなら、これらの要素を盛り込むのが常道だとこいつ意見が多いね。で、今日は、そのことについて物申すわけ？」

「いや、それ自体はどうでもいいこと書つか、あまりランキングに興味ないし」

「それじゃ、なにさ」

「この前、ランキングに関連して読者を馬鹿にしてる作者を見かけたんだよ」

「あれま。具体的には、どのよつな？」

「自分の作品はランキングに載っている作品よりも面白ことこいつ自負がある。そんな自分の作品が評価されないのは多くの読者が、異世界チートハーレムファンタジーを好むような馬鹿ばかりだからである。（意訳）」

「ふむふむ」

「これって、どう思つ？」「

「うーん、どうだらうね」

「わたしはさ、安易に読者を馬鹿にするところの行為は、創作者としての死につながると思うんだよ」

「読者が馬鹿だと断じてしまえば、創作者としてそれ以上の成長は望めないもんね」

「やうやく。あらゆる問題を読者に転嫁できてしまつから、作者は自分の側にある問題に気付けない。結果、それ以上は成長できず、

最終的には、いくら書いても同程度のものしか書けなくなる。それ
つて、創作者として死んだも同然だよね」

「読者を馬鹿にすることと、自分が馬鹿になるわけだ。こりや、笑
えない『冗談だね』」

「もちろん、どんな読者にも敬意を払えとは言わないけどさ、あか
らさまに読者を馬鹿にすることの危険性は認識してほしいよ」

「そうだねえ。創作という非常にデリケートな作業をする人間なん
だから、そのあたりには細心であるべきじゃないかな」

「考えが足りないよね。まあ、深く考えないからこそ、簡単にそ
ういうことができてしまうんだろうけど」

「そもそも、読者を馬鹿にする時点で心に余裕がないと言つか。本
当に自分の作品が面白いと思つているなら、泰然としていてほしい
ものだね。細かいことに一喜一憂するのは、自分に自信のない証拠」
「ううう。たとえお気に入りがゼロでも、感想がゼロでも、評価
がゼロでも……」

「『めん、ちょっと泣いていいかな?』

個人的な意見です（笑）

「ね」

「うん？ なに」

「時々、自分の文章に対する反対意見に、これは個人的な意見なので反発するのはおかしい、とか書いてる人がいるけど」

「あー、いるね」

「甘いよね」

「甘いねえ」

「ネットの現実を理解してないと言つた。夢見がちな子猫ちゃんかと。衆目に晒した以上、どんなに穩当な意見でも、常に反発される危険性はあるのにね」

「ましてや反発を招きやすい意見を書いておきながら、『これは個人的な意見なんですか』の一言で済むと思っている、その神経が分からない。水戸黄門の印籠じやないんだから」

「印籠はいいね。たしかに、実際に反発されたら、この紋所が目に入らぬか、とばかりに『これは個人的意見です』という言葉を持ち出してくるからなあ」

「あれだね、なんとかの一つ覚え」

「大体、その反発している側だつて、『個人的な意見』を述べているだけで押しつけているわけじゃないのに。個人的意見に反発するのはおかしいおかしい言つておきながら、自分が反発してりや世話ないよ」

「たしかに、個人的意見という言葉は緩衝材にはなり得るけど、それ以上のものではない。万能の防御壁ではないことを自覚してほしいね」

「その自覚もなしに不用意な言葉を吐く、といつのはどうなんだろう？ 読者の寛容さに期待し過ぎ。甘えていると言つてもいい」

「うんうん。さて、じゃ、よつた。今回の〆の言葉は、やっぱり

「これでしょ」

「ここまで書こうとしたことは」

「あくまで個人的な意見で、押しつける気はアリマセーン」

天賦の才

「ね」

「うん？ なに」

「自分よりはるかに面白い小説を書いている人を見ると、ちょっと凹むよね」

「たしかに」

「やっぱり、天賦の才つてあるのかな」

「あるよ。少なくとも、広義に解釈した場合の天賦の才は」

「おおお、あっさり言うね」

「だつて、事実だからね。たとえば、まともな教育が受けられず、文字を読み書きできない人に小説が書けるかな？ もっと極端な話をすれば、乳飲み子の時に虐待を受けて死んでしまつたら、小説は書けないよね。そうした人たちからすれば、小説を書ける人は天賦のものに恵まれていると言えるでしょ？ そういうた環境の差も、広義に解釈すれば、天賦の才と言えるのではないかと。運も実力のうち、ではなく、運も才能のうち、と言うか」

「じゃあ、もっと狭義に、持つて生まれた個人の能力の差、という意味での天才は？」

「うーん、これは難しいけど……ある可能性が高い、といふ感じかな」

「高いんだ」

「スポーツの分野、たとえば短距離走なんかは、それに向いた遺伝子配列とかが、すでに発見されているらしいからね。小説家に向いた遺伝子配列なんかも、そのうち発見されるかもしれない」

「ふーむ、なるほど」

「ま、やっぱリススポーツと芸術ではいろいろと違つてくるだろ？ から、確實にあるとは言えないけどね」

「もし、小説家に向く遺伝子配列があつたとしても、わたしにはそ

れがないんだろうな……なんか落ち込むよ

「はい、ストップ」

「？」

「たしかに、天才という言葉を持ち出すしかないほどの能力の差と
いうものはあるよ。だけどさ、スポーツと違って、それは『差』と
呼ぶべきものではなく『区分け』と呼ぶべきものなんじゃないかと
思うんだ」

「『区分け』？」

「うん。要は、フィールドが違うってこと。天才には天才しか書け
ない小説がある。そして凡才には凡才しか書けない小説があるんだ
よ。凡才に天才の書く小説が書けないように、天才には凡才が書く
小説は書けないんだ」

「世界一のフランス料理のシェフでも、お寿司は握れない、みたい
なことかな」

「珍妙な例えだけど、その通り。スポーツと違つて、小説は優劣が
はつきりしないからね。まあ、プロの場合は販売部数や何やらで比
較はできるけど、小説の面白さって数値化はできないでしょ」

「個々人の嗜好によるものだものね。百人中一人しか楽しめなかつ
た小説が、百人中九十九人が楽しめた小説より価値がないとは言え
ないわけで」

「だから、凡才は凡才なりの小説を書けばいい。一番まずいのは、
安易に才能という言葉を使って、努力を放棄することだと思うよ。
この場合の努力というのは、天才に追いつく努力ではなく、自分の
世界を創り上げる努力だけど」

「うーん」

「なに、まだ納得いかない？」

「いや、特に異論はないんだけど、綺麗な言葉が並び過ぎて、落
ち着かないというか」

「ま、たまにはいいんじゃない？」

伝家のなまくら刀

「ね

「うん？ なに」

「今日のキーワードは『嫌なら見なればいい』なんだけど」「ああ、それね。伝家の宝刀ならぬ、伝家のなまくら刀パート2」「よくいるよね、ちょっと作品や意見に批判的な反応が返ってきたら、『嫌なら見なればいい』って言う人。何と言つか、自己中もあそこまでいくと、いつそ清々しいね」

「どんだけ、世界はお前を中心に回ってるのかと。いくら避けようとしたって、その作者が他の人の感想欄なんかに出没して、同じ言説垂れ流してたら避けようがないだろうに」

「これまで何度も指摘してきた読者に対する過剰な要求だね、『嫌なら見なればいい』ってのは。作者側は何の努力もせずに、読者にばかり要求を突きつける」

「どうしも読者を選別したいのなら、作者の側でも努力が必要だよね。たとえば自分でサイトなりなんなりを作つて、そこで同好の士を募ればいい。実際、そういうことをしている創作者だって何人もいるし」

「なんで、そうした努力をせずには、衆目に晒されることが前提の『小説家になろう』に居続けるんだろう」「思うにね」

「うん」

「単純にめんどくさいからだと思つよ。そこまでして、創作活動を続けようとは思わないんでしょ」「その程度の気持ちだつてことね」

「そんな中途半端な気持ちだから、自分が努力するという発想が浮かばず、読む側に対する要求だけが肥大していく。そういう作者に限つて、自分は創作に対して真摯に向き合つてゐると思いこん

でるから始末が悪い」

「『嫌なら見なればいい』なんて簡単に口にできてしまつ時点で、己が創作というものに対しても不実であると知るべきだよね」

「毀誉褒貶は創作につきもの。その現実を受け入れられないなら、自分が努力して自分好みの環境を整えるべき」

「それすらできない（やらない）なら、創作活動なんてやめちゃえば？」

「さて、じゃ、今回の件だけ」

「特に思いつかないので、このままフヨーッアワト」

「不実だ……」

一言感想

「ね

「うん？ なに」

「そろそろ、この出だしも飽きてきたね」

「いや、僕に言われても……」

「まあいいや。今回のテーマは、えーと、『一言感想』ね

「いわゆる、『面白かった』『つまらなかつた』『死ね』という感想だね」

「まあ、最後のは別にして、全体的な傾向として、一言感想は、あまり良い印象を持たれないみたい。特に『つまらなかつた』の一言だけというのは、嫌う作者が多いね」

「まあ、具体的にどこがつまらなかつたか書いてくれた方が、作者としては助かるかな」

「ただ、感想を書くなら必ず役立つ感想を書け、といつ姿勢でいる作者もどうかとは思うけど」

「読者が身構えてしまうよね。これもまた、読者に対する過剰な要求の一例。気軽に作品が書けるのと同じくらい、気軽に感想が書ける、という雰囲気は重要だと思つんだ」

「うんうん」

「それにさ」

「それに？」

「一言感想だつて、作者の努力次第で、『役立つ』感想になるんじやないかな」

「どうこと？」

「たとえば『つまらなかつた』という感想を残した読者が、他にどんな作品に感想を書いているのかを調べてみたらどうだろ？ その読者が『つまらなかつた』、あるいは『面白かった』と感想を書き込んだ作品を読んでみて、共通点を探る。そうすることで、自身の

作品の問題点、改善点も見えてくるかもしれない」

「うーん、言つてることは分かるけど、けつこう大変そうだね」

「でも、作者はそれぐらい貪欲でいた方がいいと思うんだ。本当に小説が上手くなりたいなら 真摯に創作に向き合おうとするなら、ね」

「たしかに、一言感想は役に立たない、と決めつけて、現状に甘んじるよりは建設的な」

「まあ、人それぞれやり方はあるから、これが絶対に正しいとは言い切れないけど。せっかく読者が感想を残してくれたんだから、最大限活用しないともつたまいかないよ」

「もし調べてみて、その読者が自分の作品にしか『つまらなかつた』という感想をつけていなかつたら?」

「その時は……さめざめと泣こつか」

傲慢なダブルスタンダード

「ね」

「うん？ なに」

「まず初めに新年の挨拶を。あけおめー」

「ことよろー」

「さて、挨拶も済ませたといふで、本題。この前、すごいものを見た」

「南極大陸でストリーキング」

「……そこまですごくはない」

「ふむ。それじゃ、北極で」

「話、続けていいかな」

「どぞ」

「某所で見かけた意見なんだけど、一作品読んだだけで批判的な評価を下すな、公開している全作品を読んでからにしろ（意訳）」

「うは、そりやす」と

「なんつーか、もう痛々しいといつか。人はどこまで傲慢になれるのかを試しているのかしらん？」

「どんだけ読者に過剰な要求をすれば気が済むんだろう。たとえ一作品でも、それを読んでくれた時間、感想を書いてくれた労力。決して、軽んじていいものじゃないよね」

「大体、そんな理屈でいくとすれば、作者がもらった感想に異論を述べるなら、その読者がどんな感想を残しているか、全部調べてからじゃないと駄目、ということになるでしょ。なぜかそういう話にはならず、読者側ばかり批判しているものだから。へソでコーヒーが沸いちゃうよ」

「見事なダブルスタンダード。ダブルスタンダード博物館に飾りたいくらいだね」

「そんな博物館があるのかは気になるといふだけだ」

「よくあれだけ自分に対しても田的になれるものだと、逆に感心する」

「まあ、だからこそ、自分の意見がブレていることに気づかないんだと思うけどね。自分の意見を客観的に見れないことにつか」

「それって作品でも同じことだよね。自分の作品を客観的に見れない。これは創作者として致命的だと思つんだけ」

「そうした意味でも読者からの意見、特に批判的な意見は貴重だと思つんだけどねえ」

「批判的な意見に真剣に向き合つてみて、これは違つた、と思えば捨てればいいことだし」

「取捨選択の自由。これを自在に行使できるようにならなければ、ネットのみならず、現実でも役立つからおすすめ。わたしもいろいろと捨ててます」

「必要なものも、いろいろと捨ててるけどね」

小説版モンスター・ペアレント

「ね」

「うん？ なに」

「また某所で面白い意見を見かけたので、紹介するね」

「ゲラゲラゲラ」

「まだ早い、まだ」

「失敬。続きを」

「ん。まあぐだぐだと書いてあつたけど、要約すると『感想を書く際には、作者の気分を害さないよう、最大限の注意を払うべきである』」

「ふーん」

「はいはい、鼻をほじらない」

「で、読者は自分の書く感想が作者の気分を害するかどうか、どうやって判断するの？ 作者の感想に関する許容量キャバって、一人一人違うと思うんだけど」

「なんか、作品の良いところを必ず見つけ出すとかうんぬん」

「これまた、非常に曖昧だね」

「いくら良いところを挙げたところで、少しでも否定的なことを書くと、気分を害するキャラの低い作者さんもいるよね」

「そういう場合は、どうするのかね」

「その作者さんの言動を注視して、キャラを見極めた上で、感想を書けということじやないかな」

「わざわざ？」

「わざわざ」

「傲慢だなあ」

「だねえ」

「そんなもの、気分を害した、書き方が悪いと作者が言えば、否定的な意見を封殺できてしまうじやん」

「封殺したいんでしょ、本音では」

「多分、イニシアチブを常に作者側が握っている、といつ錯覚に陥つていいんだろうね」

「作品を衆目に晒した時点で、その作品に関するイニシアチブはいつたん読者に移る。読者がどんな感想を書こうが、書くこと自体を作者側から規制するようなことはできないし、すべきではない」

「作者にイニシアチブが戻るのは、感想を受け取った後だよね。別に全ての感想を真摯に受け止める、と言つてるわけじゃない。何度も言つようこそ、取捨選択の自由があるんだから、それを行使すればいい。それが作者側のイニシアチブ」

「このイニシアチブを一時でも失いたくないというなら、作品を公開しないか、自分でそのような場を作るしかない」

「作品を公開した時点で、それはいつたん作者の手を離れる、ってことを認識してほしいものだね」

「よく作品を我が子に例える作者がいるけど、はつきり言つて親として過保護すぎ。いわゆるモンスター・ペアレントにしか見えない」

「まあ、気持ちは分からぬでもないけどねえ。いつもべつたりだと、さすがに見苦しい」

「千尋の谷に突き落とせとは言わないけどさ、もう少し子供を突き放してみても損はないと思うよ?」

「うううう。さてと、それじゃ笑つていー?」

「じぞ」

「ゲラゲラゲラゲラ」

文字数制限小説

「ね

「うん？ なに」

「今日は、文字数制限小説を取り上げるよん」

「文字数制限小説……といふと、一百文字とか四百文字とか、字数を制限して書いている小説のことだね」

「そそ」

「一時期はいろいろと非難の的になつたりもしてたよね」

「そうねえ。まあ、わたしは批判も賛同もしないというスタンスではいるんだけど、ちょっと気になることが」

「なにそれ」

「うん、文字数を制限して長編を書いている人がいるよね」

「あー、いるね」

「これは愚痴でも揶揄でもなく純粋に疑問なんだけど、なんでそんなことをするんだろう」「ふーむ」

「これはわたしの持論なんだけど、ネタにはそれに適した文量というのがあると思うんだ。一百文字には「一百文字の、長編には長編の」というように」

「なるほど」

「その適した文字数に足りないと、そのネタが生きないと思うんだよね。もちろん、それは逆でも同じことが言えるわけだけど」

「つまり、長編向きのネタに文字数制限をかけることは、あまり意味がない、どころか害になる可能性もある、ってことだね」

「小説を書く際に一番重要なのは、いかにしてネタを最大限に活かすか、ということでしょう。そういう意味では長編を書く際の文字数制限は、本来の文量（そのネタに適した文量）を使った場合に比べて、どうしても完成度が低くなってしまうと思うんだよね。それは

よろしくないだろう、と

「たしかにもつたいないような気がするね」

「むりん、書く側はどんな作品でも自由に書けばいいことは思つかど、
どうせ書くなら完成度の高い作品を読者に供したいじゃない?」

「そうだねえ。結論として、文字数制限をかける時は、そのネタが
本当にその文字数で活きるのかどうか、慎重に見極める必要がある、
ということだね」

「ネタを最大限に活かしても、つまらんものはつまらんナビね」

「そのセリフはオウンゴールのような……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5243o/>

ね

2011年3月7日12時11分発行